

新潟県におけるヤナギムシガレイの資源動向

佐藤智則（新潟県水産海洋研究所）・工藤充弘（山形県水産試験場）

【目的】

新潟県におけるヤナギムシガレイの漁獲量は1976年の264tを最高に1978年以降減少に転じ、1990年には13tまで減り低位で推移した。しかし、2001年以降増加に転じ2012年では171tまで回復している（図1）。また、漁獲量の約8割を県北部の主要漁業である板曳網が占めており、重要な水産資源となっている。

本研究では今後の資源状況を予測するため、市場調査や稚魚調査等の結果を基に資源構造および資源水準の解析を行った。

【材料と方法】

(1) 市場調査

新潟漁協岩船港支所において、原則月1回、水揚げされたヤナギムシガレイの体長を測定し、各月毎の体長別漁獲尾数を算出した。

(2) 稚魚調査

2011～2013年の6月～8月に県北部海域水深50～130mで板曳網漁船により間口4mのビームトロールを曳網し、ヤナギムシガレイを採集した。採集された1歳魚の分布密度を前年の年級群豊度とした。また、2006～2010年はマガレイ稚魚調査時に採集されたヤナギムシガレイ1歳魚の分布密度を用いた。

(3) 年齢査定

市場（岩船港支所）で購入した魚体および稚魚調査等で得られた魚体について、体長測定および耳石の表面観察法により年齢査定を行い、年毎にAge-length Keyを作成した。

【結果および考察】

- 2005～2013年の県北部の漁獲物組成の体長のモードは14～16cmであった。
- 県北部海域の年齢別漁獲尾数を推定した結果、2013年は3歳魚が主体で、年齢組成は2、3、4および5歳以上で、それぞれ6、44、36および14%であった。また、2011年以降は2歳魚の割合が減少し、4歳魚以上の割合が増加する傾向が見られた（図2）。
- 稚魚調査における2012年級群の分布密度は1.0尾/kmで、2010年級群の2.4尾/kmより低く、2011年級群の0.7尾/kmと同程度であった（図3）。
- ヤナギムシガレイを対象とした稚魚調査は近3年間しか実施していないが、同様のビームトロールを用いたマガレイ稚魚調査でもヤナギムシガレイ1歳魚が採集されており、2008年および2009年級群の分布密度はそれぞれ2.7および5.2尾/kmであったことから、2011年および2012年級群豊度は低いと推察された。
- 隣県の山形県でのヤナギムシガレイ漁獲量の推移は本県と類似しており、また、山形県が2004年から実施している稚魚調査では2009年および2010年級群の豊度が高く、2011年級群からは低くなっており、本県の調査結果と同様の傾向が見られた。
- 現況ではヤナギムシガレイ資源量は高位、横ばいと考えられるが、漁獲物に占める2歳魚の減少および加入量の減少から、今後、減少に転じることも懸念されるため、新規加入量の動向に注意が必要である。

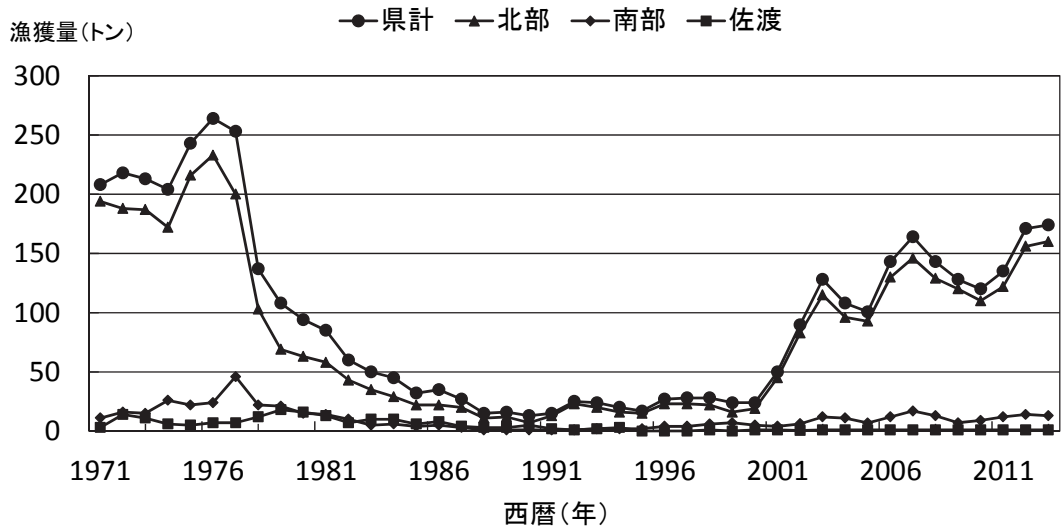


図1 ヤナギムシガレイ漁獲量の推移

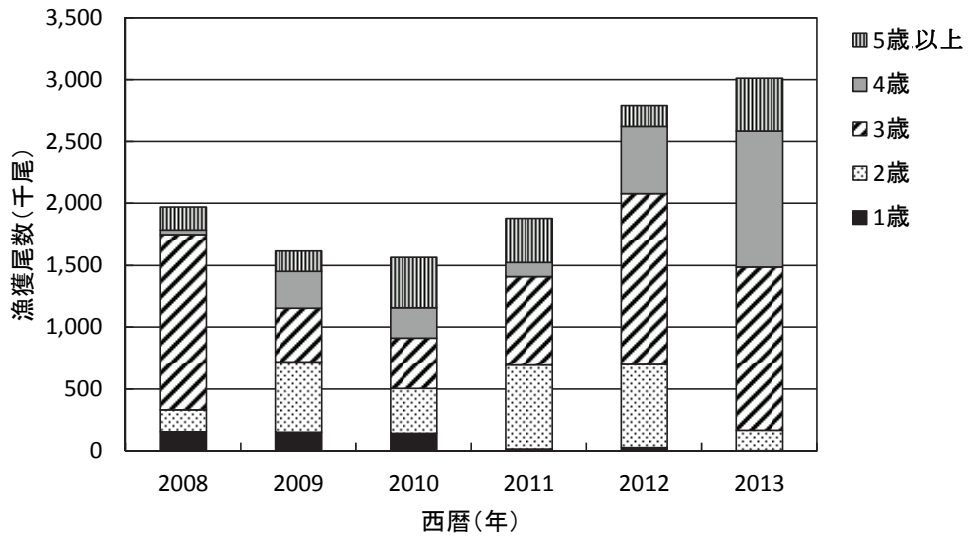


図2 県北部における年齢別漁獲尾数の推移

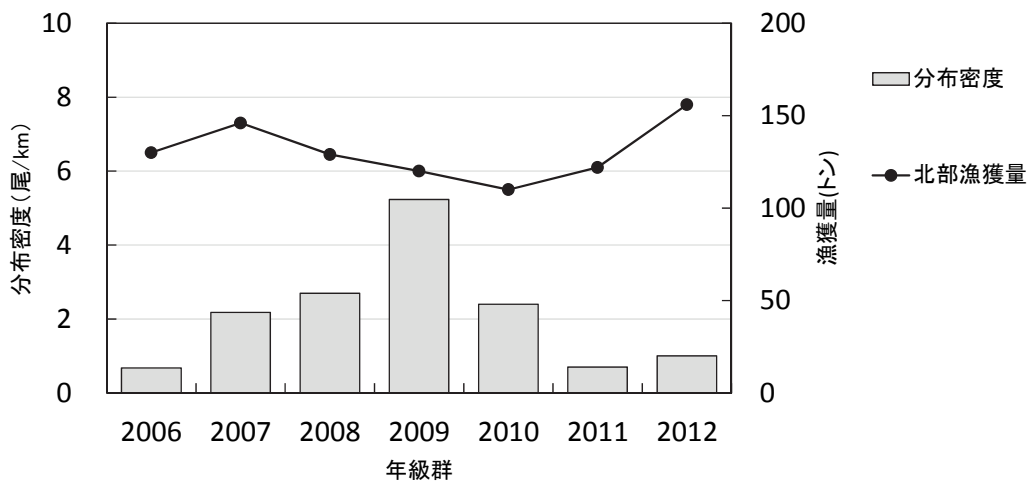


図3 北部漁獲量と年級群豊度の関係